



## 日本と中国の教育スタンスの違い



この国慶節休暇で日本に一時帰国した際に高校受験を来年に控えた我が家の娘の志望校の学校説明会に参加する機会があった。

この学校は国立の高校であり、私立の高校ならともかく、公立の高校が学校説明会を行うことに少し違和感を覚えたが、少子化の影響なのであろう、定員数の生徒を確保する為に、最近では私立公立に関係無く、どこの学校も必死になっているそうである。

それにしてもこの学校の説明会は内容豊富で非常に面白く且つとても印象的であった。それだけ生徒集めに必死なのかとも初めは思ったが、説明会を通して、校長の挨拶以外に他の教師のプログラムへの参加は全く無く、全て在校生及び卒業生の自作自演によるもので、ひとえにこの学校の生徒の自主性尊重の教育方針と在校生及び卒業生の愛校心によるところが大であることが後から理解された。

先ず驚いたのが冒頭での軽音楽同好会によるバンド演奏である。説明会場に入ると演台にドラムセットが設置してあり、何の為に置いてあるのか不思議に思ったが、ギターとベースが加わって男女各2名の計4名が演台に上がると、最近日本の若者に人気の曲のバンド演奏が始まった。校長の挨拶の前座でのバンド演奏など私の高校時代には考えられない。

次に、運動系、文化系のクラブ活動の紹介があり、全校生徒の80%が何らかのクラブ活動に参加していることが紹介された。興味を引かれたのは、これらクラブ活動以外の課外活動で「模擬裁判」という国語科の課外授業の一環として有志の参加により実施している取り組みである。これは、日本弁護士連合会主催の活動に参加する為のもので、1つの事件をもとに検察側・弁護側チームをつくり、争点を見付け整理し、被告人の有罪・無罪の立証内容を競い合うという大人顔負けの活動である。この学校は

2007年より開始された第一回大会から9回連続で参加し、好成績を収めていることに加えて、第一回大会から連続出場している学校は全国で唯一この学校だけらしい。

そしてもうひとつ強く印象に残ったのが、文部科学省より4期連続で「SSH」（スーパー・サイエンス・ハイスクール）認定を受け、これを基に大学や研究機関、企業と連携して実施している「SSC」（スーパー・サイエンス・クラブ）という理科系、数学系の分野に特化した課外授業である。「SSH」について、「国立研究開発法人科学技術振興機構」のホームページでは、「高等学校等において、先進的な理数教育を実施するとともに、高大接続の在り方について大学との共同研究や、国際性を育むための取組。創造性、独創性を高める指導方法、教材の開発等の取組。」と紹介されている。具体的には、この学校の昨年の「SSC」活動実績を紹介の方が分かり易い。「シロアリの採集・観察による、消化管に共生する水素細菌やメタン細菌が放出する気体量測定」、「近隣のSSH3校と合同でのイギリス訪問、現地の高校生と共同での科学テーマ別研究、英語による成果発表」、最近2015年ノーベル物理学賞を受賞して話題になった梶田隆章東大教授の「スーパーカミオカンデ」視察等の研究活動である。要はこれらの活動を通して、科学技術研究・イノベーションに対して若いうちから興味を持ってもらおうという取り組みである。「SSC」の企画が持ち上がると、全校生徒の中から参加者を募集・選考し、毎年年間で約40件の「SSC」が開かれ、各生徒とも、普段参加しているクラブ活動とは別に、一人平均で4件の「SSC」に参加しているらしい。

このようにこの学校では、学校側から強制することなく、生徒の自主性を尊重し、個性ある人材の育成、創造性の育成に最も重点を置いているとのことである。当然高校生活の最後には

大学受験が控えている訳であるが、京都大学法学部に通う卒業生の説明によると、高校2年生まではむしろ社会に出てから役立つことの勉強が主体で、本格的な受験勉強は3年生になってからのことである。受験勉強に明け暮れた自分の高校生活と比較すると隔世の感がある。裏を返せば、世界的な情報伝達技術の飛躍的発展に伴う人々の価値観の多様化に伴い、日本の学校教育のあり方も多様化を迫られていることの証とも言えるのではないかと思う。

ところで、我が家の娘は生後6ヶ月で中国に来てから、幼稚園、小学校、中学一年まで上海の現地校に通った。小学校が5年制で中学校が4年制であったので、日本的に言えば小学校6年までを中国の学校で過ごしたことになる。これら中国の学校で娘が受けた教育を親の目線で振り返ると、日中の教育姿勢の違いが明確で非常に面白い。もちろん中国の全ての教育現場を見て回った訳ではなく、且つ小学校と中学校の一部を体験しただけなので、これだけで日中の教育姿勢の違いを結論付けることはできないが、日中の教育姿勢の違いを垣間見ることができたと思う。

中国の学校教育は、我々が若かりし頃に日本で経験した以上の「詰め込み」「スパルタ」教育である。特に小学校では国語、数学、英語の三教科に大部分の時間を割き、理科、社会、体育、音楽、図画工作の非中学受験科目の時間は最低限に抑えられている。若しくは、課外活動として、興味のある人に対してのみ実施されている。そして授業の進度がとてつもなく早く、毎日大量の宿題が出される。宿題の大半は毎日の授業の予習・復習であり、宿題を終わらせてから就寝する頃には毎日10時を回っていた。そして、テストの成績について容赦なく順位を発表し、成績優秀者に奨励を与えることで上位者をより鼓舞し、下位者は親を含めて容赦なく叱責する。お蔭で我が娘の基礎学力は相当に鍛えられ、日本の中学校1年生に転入した後も、国語の授業に着いて行くのは少々しんどかったらしいが、数学、英語に関しては既に中国の

小学校で勉強済のことばかりで、2年生までは相当のアドバンテージがあったらしい。このような厳しい教育スタイルが中学2年生以降、特に高校に進学してからどうなるのか、実際に経験していないので分からないが、会社の同僚や部下達から聞いた話を総合すると、想像に難くない。また、小学校時代には、国語・数学・英語の毎日の宿題以外に、週末にはコンクールに出品する為の作文や工作の宿題が出された。工作に関しては、例えば、家の中にある紙や木の廃材を利用して環境保護をテーマにした未来都市を制作するというものや、2010年上海万博に関するポスターを制作するというものがあった。しかし、面食らったのは、両親が制作に全面関与して完成度の高いものに仕上げるようにとの要求が毎回出されたことである。子供の作品なのだから、子供らしさがあふれていた方が良いのではないかと思うが、どうもそういうことではなく、対外出展する作品では、学校及び教師の面子が最優先という理屈である。

これらの中国の学校での経験を前述の高校の説明会で見聞きした内容と単純に比較することはできない。また、日本の高校に関しては、あくまである学校の説明会に参加しただけであり、説明会なので、綺麗に見栄え良く演出された感があることは否定できない。しかし、少なくとも、何を尊重しその結果何が犠牲になっているのか、両者の間に一定の傾向があることははっきり見て取れると思う。勿論、これらの優劣を論じるつもりは毛頭無い。特に日本の場合、小学校の給食費を支払えない貧困家庭が益々増加していることや、学校でのいじめを苦にした生徒の自殺といった問題に対する地元行政や学校側の取り組みが後手に回っているという深刻な現実があるのも事実である。

少なくとも言えることは、将来その国を背負って立つ人材の育成において、その時々を経済情勢やその国の置かれた国際環境に応じて、適時に教育方針を調整して行くことが重要であろう。

(常務副総経理 能瀬徹 2015/10/9 記)